神々。

ラウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神々。

【Ｎコード】
Ｎ２５７０Ｇ

【作者名】
ラウル

【あらすじ】
１４代目の風神、雷神、炎神が引退を決意。１５代目は地球人から選ばれる事になった。木村蓮高橋彰中川仁は１５代目に選ばれる。

1話　15代目の三幻神

「というわけで、君たちには神様をやってもらうよ。」緑色の自称妖精が言ってきた。
「はぁ！？」といったのは3人の真ん中にいた　木村蓮だ。
「神様と言っても天国にいる神様じゃないよ。蓮だっけ？君は15代目の風の神様、風神をやってもらうよ。」緑の妖精が言ってくる。
「そしてお前は15代目雷の神、雷神をやってもらう」黄色い妖精が言った。
「俺か？」と言ったのは3人の左側にいる中川仁だ。
「んであんたは15代目炎の神、炎神をやってもらう。」赤色の妖精がいった。
「わけが分からん」と言ったのは3人の右側にいた高橋彰だ。
「というわけでここに15代目の風神　雷神　炎神がそろったってわけだね」緑色の妖精が言った。
「・・・何がなんだかさっぱり分かんないんだが。」蓮が言った。

今から5日前・・・・・

「よいか風、雷、炎。」緑の服を着た男が言った。その両脇には赤い服を着た男と黄色い服を着た男がいる。
「わしら14代目の神々は500年の使命を終えた。残りは60年ほどしか生きられん。
そこで14代目はここで引退する事にする。」
「では15代目を探すのですか？」緑の妖精、名前は風と言うらし

い。
「今度はどこの星の者ですか？」黄色い妖精、名前は雷と言うらしい。
「また１４代目と同じＬＹＤ惑星のものですか？」赤い色の妖精、名前は炎だ。
「いや、今度は天王様が地球人とお決めになったそうだ」赤い服を着た男が言った。
「地球人！？あんな貧弱で寿命が８０年程度の者が１５代目の神になるというのですか！？」風が言った。
「天王様の言った事には逆らえない。」黄色い服の男が言った。
「期限は１週間。それまでに見つからない場合はお前らは即刻クビだ」そう言ったあと３人の男は後ろを向き去っていった。

「どうする？雷、炎？」風が言った。
「行くしかないだろ」雷が言った。
「ま、がんばりますか」炎が言った。

それから５日後　日本

「痛い！」きれいにバチッと静電気の音がした。
「お～仁。本日１０回目ですな」笑いながら蓮がいった
「何だよ蓮、人の不幸を笑いやがって」仁が言った。
「「まぁそう言わない。しかし最近多いな静電気。俺全然なんないのに」
「なぁ暑くないか？この教室。」彰が言ってきた。
「いや俺は普通だけど。」
「蓮は何でそんなに汗をかかないんだ？」見ると彰は汗だくだった。
「お前も最近暑がりになったよな。前はどっちかって言うと寒がりのほうだったのに」

「知るかんなこと」

その日の放課後・・・

「じゃあ帰るとしますか。」蓮がかばんを背負って言った。

「おう」彰と仁が返してきた。

「今日も風強いな～」寒そうにしながら仁が言う

「そうか？俺はあんまり感じないけど」

「俺はこのくらいが気持ちよくていい」１２月だというのに腕まくりをしている彰が言った。

「蓮・・・お前あんまり風を感じないのか？」

「いや、なんていうか風が避けていう感じ」

「はぁ？何言ってんだお前」そのとき仁がガードレールに手を触れた

「いて！」

「お～これで１１回目だな」彰が言った。

「う～なんで俺ばっかり」

同時刻　日本上空

「お、反応ありだよ！」風が言った。

「またそれかよ」雷が言った。

「そのセリフを信じてこの５日間全然だめだったじゃんか」炎が言った。

「いやいや今度は本物かもしれないよ。」風が言った。

「そのセリフは昨日イギリスってとこで聞いた。」あきれたように雷が言う。

「で、どの神の属性のやつだ？」炎が聞いた。

「あそこには３人いるけど１人は風の属性だよ」

「おい雷!、炎の属性の人もいる」炎が言った。
「ちょっと待て・・・左にいるのは雷の属性だ」
「珍しい事だね・・・しかもこの国にはあの3人しか属性を持った人はいないようだよ」風が言った。
「仕方ない行きますか」炎が言った。

「なあ、明日の事なんだけど・・・」蓮がそこまで言いかけたときだった。
「そこの3人ちょっと待ったー!」声が聞こえた。
「ん?誰かなんか言ったか?」
「いやいやそういう仁こそ怪しい」
「ここだよここ」声の方向を見ると20cmくらいの変なものが宙に浮いていた。
「な、何これ・・・・」彰が言う。
「どうだ風?3人の力は」雷がいう
「間違いないね。この3人こそ15代目だ」
「おおっ!やった!」
「おーい人の話を聞け〜」蓮は夢の中にいるようだった。

「つまりね、14代目の風神　雷神　炎神が引退をするから君たちが記念すべき15代目になるってわけ」風は空を飛んでいた。
「風、早く連れて行くぞ」隣で雷が何かをし始めた。
「おっとそうだね。じゃあ蓮、これを付けて」と言って渡されたのは緑色の指輪だった。
そして仁には黄色の彰には赤色の指輪がそれぞれ渡された。
「これからお前たちにこの星で言う化け物と戦ってもらう。」雷と炎が上空に行った。
「じゃあ健闘を祈るよ・・・」風がそういった瞬間に周りが砂漠に

なった。
「おい！待ちやがれ！」叫んだがもうそこには3人しかいなかった。
「どうする？」困った蓮が言った。
「どうするって言われても」彰が言い終わった瞬間。
ドォォン！と砂の中から変なものが出てきた。
「ちょっとー！何これ！」仁が叫んだ。
見るとそれは大きなさそりのような生き物だった
「おい！待て！俺この年で死にたくない！」蓮が叫ぶと巨大さそりは3人に襲い掛かってきた。
「来たあ！」3人が叫ぶと彰が「このやろう！」とさそりを殴りに行った。
「やめろ！彰！死ぬぞ！」仁がこの台詞を言ったときには彰はもうさそりを殴っていた。
殴った瞬間不思議な事が起こった。
彰の手から炎が出たのだ。
巨大さそりは倒れ消えていった。
「すげー！彰！今のどうやったんだ！」蓮と仁が近づいてく。
「しらねーよ。死んでたまるかって思いっきり殴ったら手から火が出てきてよ」
「高橋彰。15代目炎神合格」見るとさっきの妖精の1人炎がいた。
「何だよ。合格って」彰が聞いた。
「あの相手はほかの星から連れてきた生物だ。あれを倒したものから合格だった」
「俺が神様になるのか？」彰がそういうと炎は頷いた。
「最後に聞いておく。いきなりだったがお前は神になりたいか？」
「なんだか知らないけどそれってほとんど絶対なれって事だよな」彰が聞く
「まあそういうことだ。いやだって言っても指輪を付けた瞬間に契約は完了している。」

「え！マジかよ！」蓮と仁は自分の指に入れてある指輪を見た。
「じゃあＯＫだ。どっちにしろ避けられない事なんだから」
「ではお前を天界の炎の神殿に連れて行く来い」炎が言うと彰の体が宙に浮いた
「彰！」蓮と仁が一緒に言った。
「心配するな。またあとで会える。それより・・・次のがくるぞ」
そういったあと炎と彰は消えてしまった
その瞬間に場所が砂漠から湖に変わった。
「今度は何だ・・・」蓮が構えると湖からサメとクジラを足したような化け物が出てきた。
「何あれ・・・」
「あれは宇宙一危険な魚類。サメクジラだ。」いつの間にか雷と風が後ろにいた。
「気をつけてね」風が言った。
「蓮。ここは俺に行かせてくれ。」自信たっぷりに仁が前に出た。
「俺は確か雷神だったよな。だったら水中戦は俺のほうが有利になる」仁がサメクジラに近づいていく。
「さっさときやがれ！」仁が手をグーにした。
この時仁は『彰みたいにぶん殴れば大丈夫だろ』と考えてきた。
そしてサメクジラが仁のほうに来た瞬間仁はおもいっきり殴った。
「どうだ・・・・」奥のほうで見物している蓮が言う。
「あらら・・・」風が後ろで言った。
「ぎゃぁぁぁ！」仁が叫んだ。
「お、おい！仁！」慌てて蓮が駆け寄る。
「彰みたいに手から出ると思ったのに・・・」仁は手をふーふーと息をかけている。
「当たり前だよ。」雷が近寄ってきた。
「炎神みたいに殴ればいいってもんじゃないよ」風も近寄ってきた。
「じゃあどうすればいいんだよ！」仁がとうとう怒った。
「答えは教えられない。でもヒントを教えてあげる」そういった後

風はマッチを1つ置いて雷と一緒に消えていった。
「マッチ・・・か」仁は悩むように首をかしげた。幸いサメクジラは湖からはでてこない様子だった。
「マッチ・・・」仁は彰の試合を思い出していた。拳でさそりを殴った瞬間に手から火が出た・・・・
その瞬間ハッとした
「蓮。もしかして俺らは力の出し方がそれぞれ違うんじゃないか？」
「どういうこと？」
「彰は炎神。つまり炎。このマッチと同じだよ。彰は摩擦で火を起こしたんだ」
「じゃあ仁は雷だから・・・」
「俺は・・・多分、放電だと思う」
「正解だよ」消えていった雷がそこにいた。
「高橋彰は摩擦で火を起こした、だがあれは炎神の特徴。雷神は違う」
「仁、ちょっとやってみろよ」
仁は手を前にやり集中した。イメージは静電気のときのあの感じ・・・
仁の手に電気が集まってきた。
「これが俺の力・・・・」
「うん。その電気をサメクジラに放つんだ」
仁は狙いを定め手を向けた。
心の中で発射！と思った瞬間に雷が放電された。雷はサメクジラに直撃しサメクジラは消滅していった。
「はい合格。15代目雷神中川仁。おめでとう」
「俺が・・・神様になるのか。」仁の手からはまだ電気がバチバチと音を立てている。
「よし！15代目になってやろうじゃないか！」
「じゃあ雷の神殿に案内するよ」仁の体が浮いた。
「蓮！お前もがんばれよ！」

「おう、じゃあ後で俺もそっちにいくわ」蓮は手を振った。

2話神々の覚醒

仁が消えた後、場所は湖から森林に変わった。
「蓮。今度は今までの中でも最強クラスだよ。」いつの間にか風がいた。
ブーンブーンと羽音が聞こえてきた。
1瞬のうちに1mを超える巨大なハチが現れた。
「なに・・・あれ」
「宇宙一速い昆虫、ハヤブサバチだよ。スピードは光速以上だから。あと針でさされると5秒で死ぬから気をつけてね」
「長い説明どうも」とたんに寒気がした。
そのとき蓮の前からハチが消えた。
「あれ、どこいった!?」蓮は周りを探す。
「消えたんじゃないよ飛んでいるんだ。速すぎて見えないだけ。」
集中するとかすかに羽の音は聞こえた。
「どこにいるんだ?」
「それじゃあ風神にはなれないよ」
そのときハヤブサバチが蓮の目の前に突然現れ針を刺してこようとした。
「どわぁ!」ギリギリで蓮はかわした。
「おお〜あのスピードを避けるって事は風神が目覚めてきたって事だね」いつの間にか木の上に風が移動していた。
「ああ〜ちくしょう、空ばっか飛びやがって。俺も飛べたら1発で倒せるのに」と思った瞬間、体が宙に浮いた。
「おおっなんじゃこりゃ!」
「15代目はなかなか優秀だね」風が感心しながらいった。
「これが風神の力か。なるほど・・・よっしゃ!」ハヤブサバチに突っ込んでいった。
「まずは彰みたいに殴ってみるか」とハヤブサバチにグーで「おり

いや！」と思い切り殴った。
「・・・」ハヤブサバチは少々ダメージを受けたようだ。
「ぎゃー！痛い！」蓮もダメージを受けていた。
「でも、少し風が吹いたような・・・」確信を持たないまま次の攻撃に移った。
「仁みたいにためて・・・」手のひらを前にした。
「おっ、何かたまってきたぞ」手のひらには１０ｃｍくらいの風の塊ができていた。
「くらいやがれ！」手から風のビームみたいなものが出てきた。
ハヤブサバチはもうそこにはいなかった。
「なに！？」またかすかに羽の音だけが聞こえていた。
「・・・あれ？」だがだんだんと視界がなれてきたのか。それとも目がおかしくなったのか・・・
「止まって見える・・・」ハヤブサバチが今どこにいるかがはっきり見えた。
そこに向かって拳を握り殴った。とたんに拳を風が包んだ。
ハヤブサバチが地面に落ちて消えていくのが見えた。
その瞬間。風には蓮の後ろに鬼のようなものが見えた。
「あれは・・・風神が覚醒したのか。こんなに速いなんて・・・」
風が蓮に近寄っていった。
「ハァハァハァ・・・」ものすごく疲れている。
「おめでとう合格だよ。」
「お、おう・・・」
「大丈夫？」
「とりあえず説明するけど、風神は風を起こす事によってその力が発揮される。」
「だから殴ったとき風が出たのか。」
「あと、あの光線の事だけどあれは手のひらに集めた風を一気に光線にするんだ」
「ぜぇぜぇぜぇ・・・」本当に疲れている。

「・・・じゃあ風の神殿に案内するよ」
「おう・・・今そっちにい・・・」
とたんに目の前が真っ暗になった。風が声をかけているのが聞こえる。

少し・・・眠らせてくれ・・・。

どのくらい時間がたったのだろう・・・
「ではあやつはもう覚醒したというのか」知らない声・・・ここはどこだ。
「そんな事はありえん。普通なら覚醒に４年はかかるぞ。それを１時間で・・・」
「雷神、炎神にも確認しましたが残りの２人も修行中に覚醒の可能性があるそうです」風の声だ・・・
「・・・１５代目は何か起こりそうだな。初代と同じような事が」
「・・・」風は黙っていた。そしてふと扉を見ると蓮がいた。
「あ、蓮！」
「お、おい風。ここはどこだよ。それにそのおっちゃん誰？」蓮は１４代目を指差した。
「蓮。このお方こそが１４代目の風神、ルーク様だよ。」
「え、あ、そうなんですか・・・・」少し考えた後。
「さっき覚醒がどうのこうのっていってたけど何の話だったんだ。」
「それについては今はお前に説明する必要はない」ルークが後ろを向いた。
「それよりこっちに来い」ルークがある部屋に入っていった。
入ってみると１４本の剣が飾られている部屋だった。
「これは・・・？」回りをきょろきょろしながら言った。
「歴代風神の剣。風神剣だ。」
「風神剣？なんだそりゃ」

「神の武器の中でも最強の武器だ。それを使えば1瞬で地球なんぞ粉々になる」
「俺にもあるのか？」
「お前にはまだない。」
「自分で作るとか？」
「己で生み出すのだ」ルークの目が光ったように見えた。
「はぁ？」
「いずれ解るときがくるだろう。それより・・・」話を続けようとしたときだった。
「なあおっちゃん。このでかい剣はいつの時代のだ？」蓮が３ｍはあろうと言う剣の前にいた。
「それは歴代最強と言われた初代風神のものだ。今から４０００年前のものになる」
「ふーん。こんな馬鹿でかい剣よく振り回せたなぁ」蓮が感心していると。
「そんな事より・・・」ルークが何かに迷った。
「あ、蓮です。木村蓮。よろしく１４代目。」自分の自己紹介をしたあと
「蓮お前は本日から3週間わしとの修行に入る。」いきなり言われた。
「何でですか？」
「時間がないからじゃ。ああ、下界の生活だったら気にするな」と言った後「風！」と呼んだ。
「はいルーク様」出てきたのは蓮だった。
「あれ！？俺がいる！？」驚いたように言うと。
「風が変装しておる、これで安心じゃろう」
「大丈夫かよ・・・」心配した目で自分になっている風を見た。
「安心して！下界のことは誰よりも知っているから」声までそっくりだった。
「・・・分かったよ。じゃあ頼んだぞ」蓮が言った後風は下界に下

りていった。

「さてと。1つ質問いい？」蓮がルークに言った。

「何じゃ？」

「彰や仁はどこにいるんだ？そろそろ会いたいんだけど・・・」

「雷神と炎神はそれぞれの神殿で修行をしている。もちろん下界には雷と炎が変装している。」

「そっか」少しがっかりしたが、まぁ無事だしいいかと蓮は思っていた。

炎の神殿修行の間

そこには壁がなくすべてが炎に包まれている場所だった。その中心部で誰かが倒れていた。

「はぁはぁ・・・。15代目の覚醒がこれほどとは・・・本気を出してしまった。」その人の前には彰が倒れている。

「これでは炎神剣はとてつもない力で・・・」そう言った後修行の間から2人に姿が1瞬にして消えた。

雷の神殿修行の間

ここは天井がなくいつでも上では豪雨と雷鳴が轟いていた。

「これが・・・俺の真の力・・・」びしょ濡れになった仁が言った。

「そうだ。雷神剣をこの俺に出させるとは、お前なかなかの実力者だな。」その男は腰に剣を戻した

「今日はここまでだ戻るぞ。」という言葉に仁は「はいっ！」とい

ってついていった。
『しかし・・・この短時間で覚醒するとは。』心の中でそう思っていた。

風の神殿修行の間

「蓮。最初に言っておこう。地球はあと４週間後に絶滅の危機になる」ルークが言った。
「えっ！どういうことだよ！」
「『キリト』が４週間後に地球に来る」
「キリト？」意味が分からず質問をした。
「こいつは宇宙のなかでもっとも『毒』という性質を持つ獣を操るいわば獣使いじゃ」
「何でそいつが地球に？」
「復讐のためじゃよ。我々神々に」ルークが言った。
「よく話がわかんないんだが」

２００年前

「貴様は天王様が死刑にするそうだ」若い男が言った。
「ハッ！上等じゃねえか。おい！お前ら覚えとけよ。いつかきっと復讐してやるからな」その男は３人の男たちを指差した。
「やれるもんならやってみろ」赤い服を着た男が言った。
男はその３人の服に書かれた文字を頭に焼き付けた。

風神　雷神　炎神という文字を。

「だからなんでそいつが地球に来るんだよ」説明をし終わった後蓮が言った。
「そうかまだ言ってなかったな。この神殿。地球にあるんだ」
「そういうことかよ・・・」諦めがついたのかようやく理解したらしい。
「やつは天界から逃げ出したらしいそれで全宇宙で指名手配されてるよ」ルークは1枚の紙を出した。そこには『お尋ね者！見つけてもむやみに攻撃しないように。宇宙警察。』
「何だこの意味の分からないお知らせは。」蓮が聞いた。
「これは地球用に配布されたものじゃ」もう1つ紙を出してきた『捕まえたら¥１０００，００００００』という内容の張り紙だった。
「なるほどね」
「そんな事どうでもいい早速始めるぞ、時間は限られてるんだ。」ルークは言い蓮も急いで準備をした。

4週間後。

「じゃあ行って来ます。」蓮が言った。3週間前よりも大きく見えた。
「ふむ、よく似合っているぞ風神服。」ルークが言う。蓮の服の背中には大きく『風神』と書かれていた。
「じゃあ瞬間移動お願いしますよ。」蓮が言う。
「分かっておる。」そういった後蓮は空を飛び指定された場所へ向かった。

「ここか・・・」蓮は地面に降り、辺りを探した。とそのとき
「なぁんだ・・・ルークかと思ったら違うじゃないか」１６０ｃｍ位の男がそこにいた。
「あんたがキリトか。」
「ほう俺の名前を知っているとは俺も有名になったもんだ・・・だが！」そこまで言った後だった。
「空を飛べるという事は。貴様！風神に仕える妖精か！妖精に用は無い！」そのあとに「出て来い！ワームたちよ！」といった瞬間に地面からカブトムシの幼虫みたいな巨大生物が現れた。
「ワームは土の中の生物で宇宙一の毒をもっている。さぁ！死にやがれ！」ワームが１匹襲い掛かってきた。そして蓮のところへ倒れてきた。
「そいつの体に触るだけで毒が体内に侵入す・・・」キリトがここまで言った瞬間ワームが吹っ飛んだ。
「なっ！」キリトが驚いた。
「あんた俺を妖精とか勘違いしてるけど違うよ・・・俺は」その瞬間に背中を見せた。
「１５代目風神。木村蓮だ！」キリトはその文字を見た瞬間２００年前のことを思い出していた。
「な、何が１５代目だ！ふざけやがって！ワーム！あいつを殺せ！」その場にいたワームが一気に襲い掛かってきた。
技を出そうとしたとき蓮の前に誰かが現れた。
「こんなに多いんじゃあ燃やすしかないよな。」彰だった。その服の後ろには『炎神』と書いてある。
「蓮！離れてろ！」彰が言った後「ハッ！！」と彰の手のひらから炎が出てきたのだ。
そこにいたワームは燃え始めた。だが１匹だけ残ったワームが蓮たちに突っ込んできた。
「彰、どうする？」蓮が聞いた。
「蓮、心配はいらない。３人目が来たぞ」その言葉と同時に上から

雷が落ちてきた。
「仁！」蓮が言う
仁の背中にも『雷神』という文字が書いてあった。「わりぃ！遅れた」久しぶりに仁の声を聞いた。
「お、お前ら、何者だ！」キリトが焦っている。
「聞いてなかったのか？いったろ俺たちは１５代目の風神、雷神、炎神だ。」
キリトは目にした３人の姿が２００年前の３人とかぶって見えていた。
「そろそろだな・・・」蓮が言った瞬間場所が変わった。
「蓮ここどこだよ？」仁が聞いてきた。
「火星だけど。」あっさり蓮は答える。
「火星！？」彰が驚いている。
「地球を壊すわけにもいかないからってルークのおっちゃんが・・・・」
「まあいいや。じゃあ、指名手配犯を捕まえますか」彰がいった。

3話　神々の戦い

「ふ、ふざけるな！何が１５代目だ！」キリトがいった。
「ふざけるも何も仕方ないだろ１５代目なんだから」蓮が言う。
「畜生！出てこい！ハヤブサバチ！」言ったとたん５匹のハヤブサバチが出てきた。
「うわっでっかいハチ」驚いたように仁が言う。
「何あれ・・・」彰の表情を見て蓮は彰がハチ嫌いだということを思い出していた。
「ああ、そうか彰たちはあれ見てないんだよな」蓮が言った。
「あれは俺のテストのときに戦った相手だ。なんでも宇宙一速くて、猛毒を持った昆虫なんだと」
「ふーん・・って彰大丈夫か？」仁が彰のほうを見た。
「俺こいつらパス・・・」彰は２人の後ろに隠れた。
「いやいや５匹もいるしお前も手伝えよ」蓮が言ったとき。キリトが小さい声で「行け」と言った。３匹のハヤブサバチが突っ込んできた。
蓮たちはまだ話をしている。
「いや、だから！俺はハチなんてものは触りたくもないし戦いたくも無いの！」とうとう彰が怒った。
「だったら、燃やせばいいだろ！」仁も怒った。
「あ、そっか」と言って彰は炎を出した。するとハヤブサバチの１匹が燃え始めた。
「お見事」蓮と仁が言った。
「畜生！全員突撃だ！」キリトの言葉にほかのハヤブサバチが一斉に襲い掛かってきた。
「おっと！」仁と蓮が避ける。
「お前ら、避けてばっかいないで攻撃をしろ、攻撃を」また彰が１匹ハヤブサバチを倒した。

「いやそういうけどねぇ・・・あ、やべぇ！もうそろそろ時間だ！」蓮が言った。
「何の時間なんだ？」仁が聞く
「いや～ルークのおっちゃんが『火星に滞在できる時間は１０分が限界だからそれまでに決着をつけろ』って」
「そういうことは先に言えって」彰が言った。
「後２，３分間だ、はやく捕まえようぜ」仁が腕時計を見ながら言った。
「ここで捕まってたまるか！」キリトが逃げ出す。
「そういうわけにはいかないよ」蓮が指をキリトに向け風のビームのようなものを出した。
「ぐあっ！」キリトが倒れこんだ。
「はい逮捕～」手錠を彰がかけた。するとキリトは突然笑い出して口を開いた。
「・・・おい１５代目達。いいことを教えてやろうか？」
「何だよ急に気持ち悪いなぁ」仁が言った。
「２００年前、俺が捕まった後どうやって天界から逃げ出したか知ってるか？」
「知るかそんなもん」あきれたように蓮が言うと火星から地球に場所が移動された。
「教えてやるよ。こいつはまだ１４代目には知られてないようだしな」とたんにキリトが大声で笑い始めた。すると空が急に暗くなってくる。
「なんだよこれ・・・・。」キリトをみるとキリトのからが黒く染まっていった。
「それはなぁ！この『悪魔』との契約を交わしたからだぁ！！」キリトの体は前とは別のものに変わっていた。
「おい！ルーク！」振り返ると１４代目の雷神と炎神がいた。

「おお、『シキ』に『ディオ』何事じゃ」
「何事じゃねえよ！キリトの野郎どうなってやがる！」１４代目雷神ディオが言った。
「この感じ、２００年前には無かったぞ」１４代目炎神シキが言った。
「・・・これはいったい！？」ルークが言った。

２００年前

「さあ入れ！」男は牢屋に入れられた。男の頭にはまだあの文字が残っている。
「死刑の実施日は後々連絡する。」　「・・・」男は返事もせず黙っていた。
そしてその１００日後・・・
「お前の死刑は３日後の明朝に行う、覚悟しておけ」この言葉にもう自分は死ぬんだと思い寝ようと思ったときだった。
「ちょとそこのあんた」なにかが自分に話しかけてきた。ふと見ると５０ｃｍくらいの悪魔のようなものが目の前の牢屋にいた。
「あんた毒の獣使いのキリトだろ？」自分の名前を言われて驚いた。何でこいつが自分の名前を知っているのかと。
「オイラ悪魔だ。名前は無い。あんたにあえて嬉しいよ」
「その悪魔が何のようだ。」男は聞いた。その言葉に悪魔は「オイラと契約をしないかい？」といってきた。
「ふざけているのか？」男は悪魔をにらみつけた。
「俺はもう死ぬんだ契約なんて・・・・・」男がここまで言った瞬間「復讐したいと思わないかい？」と悪魔が聞いてきた。
「どういうことだ。」男が反応を示した。
「あんたもどうせ誰かに捕まってここに来たんだろ？」
「ああ、確かにそうだ」男が返事を返した。
「そいつに復讐をするんだよ。そいつを殺してね」悪魔が笑った。

「無理だ。お前と契約したとこでやつらには勝てない」男が言うと。
「オイラを体に定着させておけばあんた自身が最強の武器になる。誰にも止められない最強のね。」この言葉に男は胸が急に熱くなった。
「ほう。そこまでの自信があるなら契約してやろうじゃないか」男が言った。
「じゃあ契約完了と言う事で・・・」悪魔が男の体に入ってきた。と同時に急に苦しくなった。
男は叫び苦しんだ。

３０分後。

「な、なに！」牢屋を見るとそこに男の姿は無かった。
「お、おい！誰か！」警備の男が外に出て行った。
男のいた牢屋の壁には何か爪のようなもので傷つけられたような後と文字が残っていた。

『奴等を殺してやる』と言う文字が。

「この力を1回使うと２００年間の休眠が必要になる。だからこの２００年俺はずっと待ってた、復讐のときを！」キリトの体がどんどん変わっていく。
「すごいな。悪魔との契約ってこんなに強くなれるんだ。」キリトの変化を見てもまったく動じてない彰が言った。
「お、おい！まだあいつ完全には変身してないし、今倒しちゃえばいいんじゃないか？」
「おお、仁、ナイスアイディア」蓮が言った。
「遅い！！」キリトの変身がその瞬間に終わっていた。キリトの姿は背中に羽が生え爪もとがっていた。
「悪魔との契約をして正解だったぜ。まずはお前ら１５代目を倒し

た後、１４代目を殺しに行く。」
「させないよそんな事。」蓮が言った。
「その前にこの場所を変えさせてもらうぞ。」キリトはものすごい速さで飛んでいった。
「まずいぞ！あっちの方向は・・・」彰が言った。
「日本だ・・・」３人はキリトの後を追った。

4話　死闘

キリトは地面に降りた。辺りを見回すと人々がこちらを見てくる。まずは手始めにこいつらから殺してやろうか。キリトがそう思ってたときだった。

「待て！」蓮たちが追いついた。

「ようやく追いついたか。」キリトが言った。

「おい、なんだよあれ！飛んでたぞ！映画の撮影じゃないよな！？」周りにいた人たちが騒ぎ始めた。

「まずはこの場所を掃除しよう。ゴミ共がいて邪魔だ」キリトが空に向かって飛び始めた。

「やめろっ！この人たちは関係ないだろ！」キリトに向かって蓮が叫んだ。

だがキリトはその言葉を聞かなかった。そしてキリトは1人の男性に向かって爪を尖らせ襲いかかっていった。

「まずは1人！！」だがキリトの爪は男性に刺さらなかった。仁がキリトの手を押さえたからだ。

「貴方ははやく逃げて。こいつは本気で貴方たちを殺そうとしています。」仁は自分の手にものすごい力がかかっている感じがした。

「に、逃げろ！殺されてしまうぞ！」誰かが叫んだ瞬間にその場にいた人全員が逃げ始めた。逃げると同時にパトカーの音が聞こえた。すぐに何十人もの警察が出てきた。

「お前らは完全に補遺されている！おとなしく降参しろ！」ドラマで聞いた台詞がそのまま出てきた。

「『お前ら』だって。蓮、俺ら犯罪者になっちゃうのかな？」心配そうな目で彰が見てきた。その時だった「さっさと俺の手を離しやがれ！」仁が蓮たちのほうに吹っ飛ばされてきた。「大丈夫か仁！？」2人が駆け寄る。その言葉に仁は「なんとかね」と答えた。

「・・・クズ共が」キリトが警察のほうに歩いていった。

「く、来るな！さもないと撃つぞ！」１人の警察が銃を構えた。
「キリト！」蓮が言った。「何のようだ。」キリトが振り返った。
「お前は俺たちと戦いたいんだろう？だったらお前の相手はこっちだろうが」蓮が構えた。
「そうだったな・・・じゃあ俺の本気の姿を見せてやろう。」次の瞬間、キリトの周りを黒い気のようなものが包んだ。
「この姿になっていられるのは３０分だけだ。その間にお前らを殺してやるよ。」キリトが言った。
「蓮。何かいやな感じがする。」仁が言った。
「俺もだ。本当にやばい感じがする」
キリトを包んでいた黒い気が消え始めた。キリトの顔には仮面がつき、すべての印象も変わっていた。
「・・・」キリトは何もしゃべらずものすごい速さで飛んできた。
「彰！仁！よけ・・・」その瞬間何かが蓮の腕を切り裂いた。「何っ！？」蓮は周りを見回した。
「彰、仁！」腕を押さえ蓮が後ろを振り返った。しかし彰も仁も傷を負っていた。
「クソッ！あの野郎どこに行きやがった！」彰が手に炎を出した。
「彰落ち着けそんな事しても・・・」仁が言いかけた。と同時に仁の体から大量の血が出てきた。
「仁！」彰が駆け寄る。幸いまだ息はある。
「どうなってやがる。さっきから姿が見えないぞ」蓮が辺りを見回したがキリトの姿はどこにも無い。
この時蓮は風神になった事を後悔していた。何でこんな事になってしまったのだろうと。なぜ自分の友達がこんな目にあわなければならないのだろうと。
蓮はある決断をした。
「彰、仁を連れて神殿にもどれ。そして１４代目たちをつれて来い。」
「な、何言ってんだ！そんなことしたら１４代目が来る前にお前が

死んじゃうぞ！」彰が叫んで蓮のほうを見た。
「・・・大丈夫。大丈夫だから速く仁を連れて行け。」今まで彰が聞いたことの無いような静かな声で蓮が言った。彰には声が震えているようにも聞こえた。「・・・分かった。・・・死ぬなよ。お前が死んだらいろんな人が悲しむ・・・俺も含めてな」彰が仁を背負った。
「・・・早く行け。」彰が仁と一緒に飛んで行ったのを見届けた後深呼吸をした。
「これでいいんだ。これであいつらが助かる。」蓮は死を覚悟していた。キリトが言っていた30分までまだ十分な時間がある。相変わらずキリトの姿は見えない。

風の神殿

「キリトがここまで強くなっているとはな。」ルークが言った。
「ああ、俺も驚いている。」ディオが横で言った。
「シキさん！」彰がやってきた。
「彰・・・それに仁！」シキが言った。
彰は息を切らしながらディオのほうに向かっていった。
「仁を・・・仁をお願いします。」彰は仁をディオに渡した。
「蓮はどうした？」ルークが心配そうな目でこちらを見てくる。
「蓮はまだキリトと戦っています。俺も速く行かなきゃ蓮が死んでしまう。」彰が飛びだとうとしたときだった。
「待て彰。」シキが呼び止めた。
「何ですか？俺速くいかなきゃならないのに・・・」
「お前に言っておかなければならないことがある。『覚醒』についてだ。」彰はシキの言っている意味が分からなかった。
「はぁはぁ・・・」蓮が息を切らしていた。体はもう血だらけだった。

・・・あと、何分だろう。さっきからこのことばかり考えていた。
さっきより少しはキリトの姿を目で追う事ができるようになった。
目が慣れてきたのだろう。だがもう空を飛んでいるだけでぎりぎり
は体は攻撃すら出来ない。次の攻撃があたればさすがに死ぬだろう。
そう思ってたとき目の前にキリトの姿が現れた。やばいと思ってた
ときにはもう遅かった。
バタンと地面に落ちていくのが分かった。もう自分は死ぬのだろう
と思っていた。
キリトは声を出さずに笑った。やったぞ、１５代目を殺した。まだ
時間はある。これで１４代目を殺せる。・・・いや後２人の１５代
目を殺してからにしよう。そのほうが面白い。
キリトは倒れている蓮を見てまたかすかに笑った。

「じゃ、じゃあ蓮は危険な状態じゃないですか！」シキに向かって
彰が言った。
「ああ、急いだほうがいい、じゃないとキリトの前に蓮にこの地球
を滅ぼされてしまう」深刻そうな顔をしてシキが言った。
「早く一緒に来てください！じゃないと蓮が・・・」「無理だ。俺
たちはもうお前たちの戦いには手出しは出来ない」
「何でですか！！」彰が叫んだ「俺にはどうにも出来ないんです！・
・・だからお願いします・・・蓮を・・・蓮を助けてください。」
「彰、俺の話を聞いてなかったのか？お前も覚醒している。それに
気づいてないだけだ。」
「・・・・・・分かりました。じゃあいってきます。」彰が飛び
出そうとしたときだった。
「待て！俺も行く！」傷の手当が終わった仁がやってきた。
「仁！お前大丈夫なのか？」
「うん『覚醒』については大体話は分かった。だから早く蓮を助け
ないと。」
「・・・分かった。じゃあ急ごう！」

2人は空に向かって飛び始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2570g/

神々。

2011年1月16日05時31分発行